

『方言類釋』と『倭語類解』についての研究
—共有する見出し語について—

金 銀姫

The Compliment Responses for
『hougenruisyaku』 and 『wagoruikai』
—About vocabulary to share—

Jin Yinji

要旨

在对译词汇集的古書類当中，经常会看到一些意义类似，形象类似的词汇。比如《天》，《老天》，《天道》等等。这些词在不同的书籍里出现，并且所表示的意义相同。这些词汇是在不同的年代使用的，还是在同一个时代共同使用的有待于本论文研究。那么，为什么，表示同一个意义的词汇会有如此的多样化，这些原因有可能很多。本论文将以《方言类释》与《倭语类解》作为参考资料，来研究这些原因。

1. はじめに

対訳語彙集の古書類の研究の中で、同じ見出し語が出ているのをよく見つける。例えば「天tian」と言う見出し語は『譯語類解』、『倭語類解』、『方言類釋』、『華語類抄』などの書類の中の「天文」という部分に属している。大体は「そら」と言う意味で、朝鮮語か日本語に当たる解釈を付けているが、『倭語類解』の中では「あめ」と言う解釈も添加してある。このように、同じ見出し語に

関する解釈は全く同じのものもあるし、そうでないものもある。異なる解釈については、質問相手の間違っている解答を記しているか、或いは、質問相手のレベルの制限で起きる差や、刊本から手写す時のミスで、そのまま現在まで伝わって来たという理由を考えられる。本論では、『方言類釋』と『倭語類解』を資料とし、その中の共有見出し語に関する解釈の分析を行う。したがって、『倭語類解』と『方言類釋』の日本語の部分の関係を整理してみる。

2. 先行研究

2-1 『方言類釋』について

『方言類釋』は韓国語、中国語、清語（満州語）、蒙語、倭（日本語）語の五つの言葉の対訳語彙集で、洪命福等が正祖二年（1778年）に編纂した四巻二冊からなっている筆写本である。一般的には『方言集釋』又は『方言輯釋』の名で知られているが、原本の名前は『方言類釋』である。この本は中国語語彙を見出し語として括弧の中に入れ見出し語の下に語彙に関する韓国語の意味を付け、括弧の下には中国語、清語、蒙語、倭語の順で対応する意味を付けられている。

朝鮮は中国、清、蒙、倭の言葉を使っている国に囲まれて、往来も多い故、司訳院を設置してこれ等の方言（四方の言葉）を習得してきたが、方言の変化によって、四方（漢語、清語、蒙語、倭語）の人達と交流ができなかったため、正祖二年に訳官洪命福などに当時使える四つの言葉の方言を分類して、韓国語で釋を付けたのである。

『方言類釋』は天文、時令、地輿など87個の部門に分け、5191個の見出し語からなっている。この中には「中州郷語」（中国の河南省の方言）という項目も含まれている。『方言類釋』は先行する対訳辞書の『譯語類解』、『譯語類解補』、『蒙語類解』、『蒙語類解補』、『同文類解』、『倭語類解』などを整理、補充したものと見える。

2-2 『倭語類解』について

『倭語類解』は、朝鮮人によって作られた日本語辞典で、朝鮮人の日本語

研究を示すものとして知られている。通文館志巻之七によれば、洪舜明が編修し、17世紀末から18世紀初ごろに成り立っている。本論文での『倭語類解』は、国語学国文学研究室のもとに継続的に刊行している一つのものである。福井県の曹洞宗大本山永平寺の所蔵であるが、もとは金澤庄三郎の蔵で、金澤博士の筐底に長らく秘められていたものである。そして、それは現在知られている限りの唯一の原刊本なのである。

金澤博士旧蔵、曹洞宗大本山永平寺現蔵の刊本は上・下（乾・坤）二巻二冊にわかれ、縦約31糎、横20.5糎の袋綴本である。表紙は朝鮮刊本に普通に見られる黄褐色の染紙を用い、題簽はなく、その代わりに『倭語類解 乾(坤)』と墨書している。上巻は、巻初に目録1張、続いて56張存する。なお巻末にも、巻初と全く同じ目録が1張重複して付けられている。下巻は巻初に目録1張、続いて本文54張あり、ここで一応『倭語類解下終』という内題があり、更に次に張附を改めて3張「口訣」と題する吏読と、日本語訳がこれのみ片仮名をもって注せられて、附載してある。なおその終には、「伊呂波間音」として日本語の濁音が・ご・だ・ば行音に関する記述が見える。これらは一応張附は本文と別ではあるけれども、その板心は「倭語類解下」となっている。また、最後に「讐整官 前判官韓廷脩」云々の刊記が記された1張があるが、これも、板心が単に『倭語類解』とのみになっている。一葉八行、上下二段が本文の原則であるから、通常十六個の語がそこに収められていることになる。総語数は、最後の吏読まで含めると3409個となる。

『倭語類解』は漢字語を見出し語として、その下に双記して右には見出し語に当たる朝鮮語（其最後の一字は原則として、見出し漢字の朝鮮字音である）を、又、左には、見出し漢字の日本字音を、更にその下に○を付して、見出し語に対する日本語を、いずれもすべて諺文をもって、注記している。本書の編者は明らかではないが、「洪舜明」その人を擬する考え方があろう。その編纂に当たって、「日本人雨森東」に質したという。なお、本書は他の『類解』（『訳語類解』、『蒙語類解』、『同文類解』）とともに、「官版」であり、科試用書として編纂されたものであろう。

2-3 雨森東氏について

『倭語類解』の日本語の精度が高いと言える理由の一つは雨森芳洲がその編纂に参加したことである。従って、雨森芳洲がいかなるものであるかを知ることが必要である。

雨森芳洲は北近江の雨森村（現滋賀県伊香郡高月町雨森、また京都・伊勢ともいう）で生まれ、字は伯陽である。はじめ俊良と称し、還俗・仕官後は藤五郎、さらに東五郎と称した。朝鮮では中国風に雨森東の名を用いている。のちに六代藩主宗義誠より一字を賜り誠清と名乗る。芳洲はその号、別号には橋窓・樸斎・尚綱斎・（朝鮮逗留中は）院長等がある。

雨森氏は江北の土豪として知られ、戦国期には浅井家に仕え数々の武將を輩出したが、小谷城落城・主家滅亡に際し没落したという。芳洲の父清納は京都で町医者を開業。12歳頃彼みずからも医学を志すが、のち儒学に転じ柳川震澤（1650年～）に師事。父没後の18歳頃江戸へ出て木下順庵（1621年～1698年）に入門。新井白石（1657年～1725年）・室鳩巢（1658年～1734年）・榊原篁洲（1659年～1706年）・祇園南海（1677年～1751年）と共に『木門の五先生』に数えられた。「文は芳洲、詩は白石」と称されるなど文章の秀逸さは木門随一で、師は「後進の領袖」と評した。

元禄元年（1688年）同門の対馬藩儒西山順泰が没し、翌年藩は順庵に後任の儒者を求めた。対馬はその地理から古来より日朝交流の窓口で、徳川幕府は朝鮮外交の実務を対馬藩に命じていた。よって藩では進講のほか外交文書の解説・起草、中国等の漂着船の筆談役などをも務めうる学識豊かな儒者を必要としていた。順庵は当時22歳の芳洲を抜擢したのである。

師の進言もあってか、若い芳洲は江戸藩邸勤めのまま引き続き順庵のもとで学ぶよう藩から命じられた。翌年芳洲は中国語を学びはじめ、長崎へも数度遊学している。藩の儒者採用の目的を承知して、唐音学習を通じて漢語能力の向上をはかるためであったろう。仕官から4年後、26歳で対馬に初赴任された。

以後約40年間、主務である藩主らへの進講・真文役（外交文書の解説・起草）

をはじめ、求めに応じ漂着船の筆談役・文庫（古記録類）の書籍係・歴代藩主の実録編纂・朝鮮支配役の補佐役・朝鮮通信使に随行する真文役・参判使や裁判役（両者とも藩から朝鮮へ派遣される使者・外交官）・幕府との折衝役・藩主の御用人などを務めた。

31歳で朝鮮支配役の補佐役を命じられ、はじめて朝鮮へ渡ったのは元禄15年、35歳の時だった。この訪朝は彼に朝鮮及び朝鮮語の理解が不可欠なものと痛感させ、1703年から1705年にかけて2度釜山の倭館（藩の外交役所）に滞在して、精力的に朝鮮語と朝鮮の諸事を学んだ。藩儒みずから朝鮮留学した前例はなく、芳洲の意気込みと真剣さが窺われる。この留学で朝鮮語をほぼマスターし、朝鮮側の日本語辞典『倭語類解』の編集に協力し、自らも『交隣須知』等16冊の朝鮮語入門書をも作成した。さらに自身の経験から通訳の重要性に着眼し、単に朝鮮語が得意なだけでなく才智・学問・篤実をそなえた質の高い通訳の育成を説き、のちに藩の通訳養成制度の確立にも生かされていった。1711年には徳川家宣就任を祝う朝鮮通信使（正使・趙泰億）に随行して江戸に赴き、1719年の徳川吉宗就任祝いの通信使（正使・洪致中）でも江戸に随行した。この使節団の製述官であった申維翰が帰国後に著した『海遊録』に雨森芳洲活躍の姿がいきいきと描かれている。

3. 共有見出し語の比較

『倭語類解』と『方言類釋』の共通している見出し語は三百くらいある。両書の共通している見出し語とそれに当たる日本語の注記を見てみよう。次の表はその一部である。

表から分かるように、両書の中には、同じ見出し語に当たる注記が同じ語

見出し語(『方』で追加の部分) [表音式表記]	『倭語類解』の注記	『方言類釋』の注記
天 [tian]	そら、又あめ	そら
日 [ri]	ひ	ひ
月 [yue]	つき	つき
日食 [rishi]	にっしょく	いっしょく

三台星 [santaixing]	さんたいせい	さんたいせい
参星 [cansing]	しんせい	さんせい
雪 [xue]	ゆき	ゆき
雹 [bao]	ひのあめ	あられ
霜 [shuang]	しも	しも
霧 [wu]	きり	きり
去年 [qunian]	きょねん	しょうねん
明年 [mingnian]	みょうねん	らいねん
豊年 [fengnian]	ほうねん	ほうねん
驟雨 [zhouyu]	ゆうだち	にわかあめ
地 [di]	つち	ち
岭 (子) [ling (zi)]	いたたきまたはみね	とうげ
岩 (頭) [yan (tou)]	いわ	いわ
曾祖 (父) [zengzu (fu)]	ひおおち	ひおうんち
曾祖 (母) [zengzu (mu)]	ひばば	ひおうめ
祖父 [zufu]	じじ	おうんち
祖母 [zumu]	ばば	おうめ
父 (亲) [fu (qin)]	ちち	ちち
母 (亲) [mu (qin)]	はは	はは
养父 [yangfu]	ようふ	ようふ
叔父 [shufu]	おち	ちさいおち
兄弟 [xiongdi]	きょうたい	おとと
叔父 [shufu]	おじ	ちさいおぢ
妹 (子) [mei (zi)]	いもおと	いもと
妹夫 [meifu]	いもうとおっと	おもとのおとく
子 (兒子) [zi (erzi)]	むすこ	むっこ
養子 [yangzi]	ようし	やしのうむっこ
媳 (女兒) [xi (nv,er)]	むすめ	むすめ
侄 (侄兒) [zhi (zhi,er)]	おい	おい
人中 [renzhong]	にんじゅう	はなした
憔悴 [qiaocui]	しょうすい	こんかれました
嚏 (嚏噴) [ti (tipen)]	くっしゃみ	はなひる
頓悟 [yingwu]	はつめい	さかじもの
小心 [xiaoxin]	つつしむ	しょうしんました
紗帽 [shamao]	しゃぼう	しゃかもり
団領 [tuanling]	だんりょう	じょうぞく
聾 (子) [long (zi)]	つんぼう	みみつぶもの
菩薩 [pusa]	ほさつ	すくう
心 [xin]	こころ	むらんと
腎 [shen]	ほそめぐる	まら
沙彌 [shami]	こぞお	わらんべぼうつつ

彙も、異なる語彙もある。また、見出し語の中にも、「子」、「児」、「頭」などの接尾語がついて、同じ注記をしているのものもある。次には、このような見出し語と、それにあたる注記の比較をおこなって、両書はどのような特徴を持っているかを見つめることにする。

「天」の常用音訓には「テン、あめ、あま」があり、「①《名詞》あめ。頭上に高く広がる大空。②《名詞》天①にいます最高の神。③《名詞》人間界に対して、自然界すべて。④《名詞》天の神が下す運命。⑤《名詞》天の神の命を受けて人間界を収める者。⑥《名詞》夫に対する尊称。⑦《名詞》(仏)人間の世界の上にある、仏の世界のこと。また、そこにすむもの。⑧《名詞》キリスト教で、神のいるところ。⑨《名詞》(俗)日。」の意味を持っている。『倭語類解』では「そらまたはあめ」と注記しているが、『方言類釋』では「そら」と注記している。「あめ」は「天」の別訓で、大空の意味を表す。『方言類釋』の日本語の注記の部分が『倭語類解』の注記の部分を整理して、補充したという記載があるが、『方言類釋』ではただ「そら」だけで「天」の意味を表しているのは「あめ」と「そら」の中で一つ選んだのであろう。(基本的に『方言類釋』では、見出し語に当たる日本語を一つしか記していない)

「日食 rishi」の「日 ri」は「ニチ」、「ジツ」、「ひ」、「か」の音があって、「①《名詞》ひ、太陽。②《名詞》ひ、太陽の出ている時間。昼間。③《名詞》ひか、一昼夜。④《単位》か、日数を数える言葉。⑤《副詞》ひび・ひに。毎日。⑥《副詞》ひび・ひに。一日一日と。⑦《名詞》広く、期待・ころ。」の意味を持っている。『倭語類解』では「にっしょく」と注記しているが、『方言類釋』では「いっしょく」と注記している。「日食」に当たる日本語は「日蝕」である。『倭語類解』での「にっしょく」と『方言類釋』の「いっしょく」は双方とも「日蝕」をいうものと考えられる。「にっ」と「いっ」の違いなのが、おそらく『倭語類解』では「日」の「ニチ(呉音)」という音を取って「にっしょく」になったのだろう。『方言類釋』ではなぜ、「いっしょく」で日本語の表記をしていたのか。『方言類釋』が編纂される時の18世紀初めの頃に朝鮮語にはもう子音「ㄹ」の「ㅇ」への変化が起こっていた。これは「訳

語類解」の漢語の見出し語の対する朝鮮語の注記を見ればよく分かる。このような現象によって、『方言類釋』での日本語の注記を朝鮮文字で記入するとき「ㄴ」の代わり「ㅇ」を使用して「ㄴㅇㅇ につしょく」が「ㅇㅇㅇ いっしょく」になった可能性もある。

「参星」の「参 can」は「《数詞》みつ・みつつ。」の意味を表す時には「サン」と読み、「①《動詞》まじわる。いくつもいっしょにまじる。ちらちらする。②《名詞》仲間入りする。あずかる。③《動詞》目上の人に会う。お目にかかる。」の意味を持っている時には「ソン・サン・シン」と読み、「参差」とは、長短入り混じったいっしょになるさま。唐代には、どうやら、多分の意の副詞に用いる。」の意味を表す時には「シン」と読み、「《名詞》二十八宿の一つ。基準星は今のオリオン座に含まれる。からすき。オリオン座の三つの星。」の意味を持っている時にも「シン」と読む。

見出し語「参星」は両書とも天文類に属しているので、星を表す語彙に間違いない。それなので、「参」の読み方は「シン」が正しく、「参星」は「しんせい」と読むべきである。『倭語類解』では「しんせい」と注記しているが、『方言類釋』では「さんせい」と注記している。朝鮮語の書き方上「サン(산)」と「シン(신)」の差が「、」一つだけあって、『方言類釋』を作成する時書き間違ったものが、手写本としてそのまま伝えて来たという可能性もある。また『方言類釋』が、『倭語類解』の編者程日本語に通暁していなかったか、或いは日本語の方言を採取したかとも考えられる。この点はいずれ共判断を下し難しい。

「霜 shuang」は「ソウ」または「しも」と読んで、「①《名詞》しも。空気中の水蒸気が、夜間、地上で凍ったもの。②《名詞》としつき。③《形容詞》しものように白い。④《名詞》冷たいものたとえ。また、法律などの厳しいことたとえ。⑤《名詞》白いこな。葉の白い粉末。また、柿などの表面にふきでる白い粉。」の意味を持っている。『倭語類解』では「じも」と注記しているが、『方言類釋』では「しも」と注記している。両書で「霜」に当たる日本語「じも」と「しも」は清音と濁音の区別がある。地方によって異

なる方言もあるし、あまり清音か濁音を区分して使わないところもあるので、ここではおそらく発音上の聞き間違いかも知れない。

「驟雨」は「シュウ（シウ）ウ」と読んで、「にわか雨」の意味を持っている。『倭語類解』では「ゆうだち」と注記しているが、『方言類釋』では「にわかあめ」と注記している。「驟 zhou」は「①《動詞》はしる。②《形容詞》はやい（はやし）・にわか（にはかなり）。駈足で。物事のテンポが急であるさま。③《副詞》しばしば。同じことを、時をへだてずにくりかえすさま。間をつめて何度も。」の意味を持っている。「驟」の2番目の意から、「驟雨」は「急な雨」を表していることが分かる。「ゆうだち」と「にわかあめ」はまったく同じではないが、「急にきて激しく降る雨」の意では共通している。

「地」は「土壤」の意味で「チ」または「ジ」と読む。『倭語類解』では「つち」と注記しているが、『方言類釋』では「ち」と注記している。「つち」は「地」の常用音訓を表す。

「嶺」は「①みね 高いみね ②「五嶺」とは、広東省北部にある連山で、大庾タイユ・始安・臨賀・桂陽・揭陽の五つのみねがある。」の意味で「リョウ（リャウ）」または「レイ」と読む。『倭語類解』では「いたたきまたはとうげ」と注記しているが、『方言類釋』では「さか」と注記している。「いたたき」はものの一番高いところの意味、「みね」は山のいたたきのとがった所の意味でほぼ似ている。「とうげ」は山の坂道を登りつめた所、山の上りから下りにかかる境の意味、「さか（坂・阪）」は一方は高く一方は低く傾斜している道に意味で「とうげ」の一部の意味を「さか」が持っている。「倭名類聚抄」の観名版では「サカル・タケ」の古訓読が記載されているが、「サカル」の「さか」を取ったのだろうか。

「岩」の意味で『倭語類解』では「巖」を、『方言類釋』では「巖頭」を見出し語としている。両書とも「いわ」と注記している。「頭」は①（名詞）あたま・かしら・こうべ（かうべ） まっすぐたっているあたま。②（名詞）かしら・かみ 人々の上になつ人。長。おさ。③（名詞）あたま 一番はじめ。最先端。てっぺん。④（名詞）ほとり 場所をあらわすに語につけ、そ

の目立つ部分や端の部分を表す。⑤ (単位) 牛を数える単位。⑥ (助詞) [俗語] 目立つ形をもった物を表す名詞や、形容詞について、そういう性質をもつところや目立った性質を表す。」の意味を持っている。

「巖頭」の「頭」は⑥に当って、「巖」の後ろに付いて「巖」の話し言葉を作る。

同じように、「ちち」、「はは」という意味で『倭語類解』では「父」、「母」を、『方言類釋』では「父親」、「母親」を見出し語としている。

「叔父」は父の弟の意味で「しゅくふ」または「おじ」と呼ぶ。『倭語類解』では「おじ」と注記しているが、『方言類釋』では「ちさいおじ」と注記している。「おじ」は「叔父」、「伯父」の両方を表すことができ、『方言類釋』ではこれを区別するために「ちさい (ちいさい)」をつけて詳しく解釈している。

女きょうだいのうちの年少者の意味で『倭語類解』では「妹」の見出し語に「いもうと」という解釈を注記しているが、『方言類釋』では「妹子」という見出し語に「いもと」と解釈を注記している。「いもと」は「いもうと」の「も」の長母音が短母音表記されており、現在でも或種方言に埒こる残る。

「妹夫」は妹の夫の意味である。『倭語類解』では「いもうとおっと」と注記しているが、『方言類釋』では「いもとのおとく」と注記している。『倭語類解』での「いもうとおっと」は「妹」と「夫」の各漢字の読み方を合わせて記入したもので、『方言類釋』での「いもとのおとく」は「おとこ」の「こ」を「く」と聞いた上、記入したもので「妹の男」という意味を表すと思われる。

「娘」の意味で『倭語類解』では「媳」、『方言類釋』では「女兒」という見出し語に「むすめ」という解釈をつけている。中国語で「媳」は「嫁、息子の妻」の意味を持っている。

「婿、亭主」の意味で『倭語類解』では「婿」、『方言類釋』では「女婿」という見出し語に「むこ」という解釈をつけている。「女婿」は「婿」の話し言葉といってよい。

「甥」の意味で『倭語類解』では「侄」、『方言類釋』では「侄兒」という

見出し語に「おい」という解釈をつけている。

「兄弟」は「ケイテイ」または「キョウ（キャウ）ダイ」と読んで、「①兄と弟。②他人を親しんでいうことば。③〔俗語〕弟のこと。また、友人や同輩に対しての自称。④婚姻によって親戚となった者。」の意味を持っている。

『倭語類解』では「きょうたい」と注記しているが、『方言類釋』では「おとと」と注記している。「きょうだい」の「だ」の濁音は朝鮮語で記入するとき意識して区別していないため、『倭語類解』の「きょうたい」は「きょうだい」とみてよい。「おとと」は「おとうと」の約語であるので、『方言類釋』での「兄弟」に付けた注記「おとと」は「兄弟」の解釈の③番にあたる。つまり、「おとと」は「兄弟」の方言或いは口頭語である。

「人中」は「ジンチュウ」と読んで、「①たくさんの人の中。②鼻の下から上唇までたてについている。くぼみ。はなみぞ。」の意味を持っている。『倭語類解』では「にんちゅう」と注記しているが、『方言類釋』では「はなした」と注記している。「にんちゅう」の漢字は「人中」で表す。「人中」のもう一つの読み方は「ジンチュウ」である。「はなした」は「鼻はな」＋「下した」として鼻の下にある「人中」の位置を取り上げて、「人中」の解釈としている。

中国語で「子」と「兒子」は両方とも「息子」の意味を持っている。『倭語類解』では見出し語「子」に「むすこ」と注記をし、『方言類釋』では見出し語「兒子」に「むっこ」と注記をしている。「養子」は「①実子に対して、養子縁組によって子となった者。やしない子。②養女に対して、他人であるが、その人の子となった男。③子をうむ。」の意味で、「よう（やう）し」と呼ぶ。『倭語類解』では「ようし」と注記しているが、『方言類釋』では「やしのうむっこ」と注記している。「養子」＝「やしなうむっこ」＝「やしなう」＋「むっこ」

『方言類釋』では「兒子」も「養子」の「子」も「むっこ」と解釈している。「むっこ」は「息子」意味だと思うが、日本語語彙には「むっこ」というのがない。「す」と「っ」の一つの差が聞き手の間違いで生じた問題ではないだろうか。

「心」は「シン」と読んで、「①（名詞）五臓の一つ。循環系の中心をなす

器官。心臓。② (名詞) ころ 精神。③ (名詞) むね。④ (名詞) 物事の中心。真ん中。また、真ん中にあるもの。⑤ (名詞) 二十八宿の一つ。基準星は、今のさそり座に含まれる。なかご。」の意味を持っている。『倭語類解』では「ころ」と注記しているが、『方言類釋』では「むらんと」と注記している。

「腎」は「ジン」または「シン」と読んで、「① (名詞) 五臓の一つ。血液を清めて尿を排出する働きをする器官。腎臓。② 「外腎ガイジン」とは、辜丸。」の意味を持っている。『倭語類解』では「ほそめぐる」と注記しているが、『方言類釋』では「まら」と注記している

『方言類釋』では「心」を「むらんと」と注記している。「むらんと」は意味が不明か、或いは意味がない。しかし、「腎」の古訓「ムラト」と酷似している。『方言類釋』の17bには「心」と「腎」はあい付いた列に書かれており、「心」の注記に「腎」と間違っ書いた可能性もある。「心」と「腎」は訓読が「シン、ジン」であるため混沌しやすい。

「憔悴」は「ショウ (セウ) スイ」と読んで、「悩みや病気のためやせ衰える。また、疲れ苦しむ。」の意味を持っている。『倭語類解』では「しょうすい」と注記しているが、『方言類釋』では「こんかれました」と注記している。「憔」の類義語に「焦」がある。「焦」の意味の一つに「こがれる」がある。「こがれる」に「ました (終助詞)」を加えると「こがれました」になる。これをローマ字表記にすると「kogaremasita」になり、「こんかれました」のローマ字表記「konkaremasita」とかなり似ている。それなので、『方言類釋』での注記は『倭語類解』での注記と類似だといえる。しかし、終助詞の「ました」を付けていることから、話し手の言葉を聞くままに記入したということが分かる。

「嚏」は「タイ」または「テイ」と読んで、「くさめ、くさめする (くさめす)、はなひる、くしゃみ、鼻づまり、くしゃみする。」の意味を持っているながら、名詞と動詞の性質を表している。古訓は「ハナヒル」である。『倭語類解』では「くしゃみ」と注記している。「嚏噴」は『方言類釋』で「はな

ひる」と注記している。これは、「嚏」の意味の一つと同じであり、「嚏」は後ろに「噴」を付けて「嚏噴」になっても「嚏」と同じく解釈されるといえる。また、「嚏噴」の注記は「嚏」の古訓と同じである。現在、中国では「くしゃみ」の意味で、「嚏噴」ではなく「噴嚏」を使っている。

「穎悟」は「エイゴ」と読んで、「才知が優れて賢い。さとい。」の意味を持っている。『倭語類解』では「はつめい」と注記しているが、『方言類釋』では「さかしもの」と注記している。「はつめい（発明）」は「①物事の正しい道理を知り、明らかにすること②新たに物事を考えだすこと③機械・器具類、或いは方法・技術などを始めて考案すること④賢いこと。特に、子供で頭の回転が早く賢いさま。」の意味を持っている。「さかしもの」=「さかし」+「もの」。「さかし」は「賢い」の語幹で、「かしこく、すぐれている。聡明だ。」の意味を持っている。「もの」は「事」の意味である。つまり、『倭語類解』での注記と『方言類釋』での注記は「賢い」という意味を表す共通点を持っている。

「小心」は「ショウ（セウ）シン」と読んで、「①おくびょうなこと。気が小さい。②細かいところまで行き届いていてつつしみ深い。注意深い。」の意味を持っている。『倭語類解』では「つつしむ」と注記しているが、『方言類釋』では「しょうしんました」と注記している。「つつしむ」は「①用心する。過ちがないようにする。②恭しくかしこまる。③物忌みする。謹慎する。④度を越さないように控え目にする。」という意味を持っていて「小心」の2番目の意味と同じである。「しょうしんました」は「しょうしん」に終助詞「ました」を加えたものだと推測する。

「紗帽」は「サボウ」または「シャボウ」と読んで、「薄絹でつくった帽子。身分の象徴。」の意味を持っている。『倭語類解』では「シャホウ」と注記しているが、『方言類釋』では「シャカモリ」と注記している。

「団領」の「団」は「ダン」または「トン」と読んで、「形容詞 まるい・まとか 円形である。」の意味を持っている。「領」は「リョウ」と読んで、「名詞 うなじ・くび すっきりときわだったくびすじ。えりくび。着物のえり。」

の意味を持っている。『倭語類解』では「だんりょう」と注記しているが、『方言類釋』では「じょうぞく」と注記している。『方言類釋』の漢語の注記の部分に「団領または圓領」と書かれていることから、「団領」は「まるいえり」という意味だと思われる。『倭語類解』では「団領」の読み方で解釈しているが、『方言類釋』では「じょうそく」と注記している。

「早飯」は『倭語類解』では「あさめしまたはあさいい」と注記しているが、『方言類釋』では「あさめし」と注記している。「夕飯」は『倭語類解』で「いうめし」または「いういい」と注記しているが、『方言類釋』では「ゆうんべめし」と注記している。

「聾」は「①名詞 つんぼ 耳の聞こえないこと。また、その人。みみじい。②形容詞 耳が聞こえない人のように。物事に明らかでないさま。」の意味を持っている。『倭語類解』では「つんぼう」と注記している。『方言類釋』では「聾」に「子」を付け、「聾子」を見出し語として、「みみつぶもの」と注記している。「みみつぶもの」は「みみつぶれもの」と思われ、『倭語類解』での解釈と同じ意味を表している。

「菩薩」は「ぼさつ」と読んで、「仏につぐ地位にある有徳の修行者。仏を志し終行する者。大乘仏教を信ずる者。仏道を求め、衆生を救う事を願い、ついに仏になる。」の意味を持っている。『倭語類解』では「ぼさつ」と注記しているが、『方言類釋』では「すくう」と注記している。「菩」が仏語用語と使われる時には「ブ、ホ、ボ」の読み方がある。「菩薩」は「ぼさつ」から現在の「ぼさつ」になっている。「薩」は「あまねく衆生をすくう。濟度、また、仏道修行をして悟りを得る。」の意味を持っている。『方言類釋』は「菩」と「薩」の共通の意味「衆生をすくう」をとって注記をしたのだろうか。

「沙彌」は「シャミ」と読んで、「{仏教用語} 出家したての男。また、僧一般のこと。」の意味を持っている。『倭語類解』では「こぞお」と注記しているが、『方言類釋』では「わらんべほうつつ」と注記している。「こぞお」は「年少の僧。子供の僧。雛僧。」の意味を持っている「小僧（こぞう）」の可能性が高いと思われる。「わらんべほうつつ」は「子供の僧」の意味を持つ

ている「童坊主（わらべぼうず）」の可能性がある。なので、両書での注記は意味的には通じている。

まとめ

両書の共有している見出し語に関する比較を通して以下のようなことが分かった。

①『方言類釋』は『倭語類解』と同じ語幹を使いながら接頭語、接尾語を付けて、口頭語か会話に使える見出し語を取り上げている傾向が多い。例えば、「巖」→「巖頭」、「父」→「父親」、「母」→「母親」、「妹」→「妹子」、「婿」→「女婿」、「侄」→「侄子」、「聾」→「聾子」などがある。

②『倭語類解』では見出し語の漢字音を注記としているが、『方言類釋』では見出し語の漢字音以外のものを注記としている傾向が多い。A.「兄弟」の場合、『方言類釋』は会話上の意味を取って注記として記入してある。B.「人中」の場合、『方言類釋』はそのものに対する解釈ではなく、人体での人中の位置づけでそのものを表明する。C.「養子」の場合、『方言類釋』は見出し語の各字ずつ日本語に翻訳し、それを合わせて注記としている。D.「叔父」の場合、『方言類釋』は『倭語類解』より詳しい説明を注記としている。

③両書の同じ見出し語に対する注記の形が違うが、意味的には同じ部分がある。『方言類釋』は『倭語類解』の注記部分の一つか、意味の一部分を取り上げている。例えば「天」、「嶺」、「嚏噴」、「菩薩」などがある。B. 両書の注記部分が異なる表現を使っているが、意味は同じである。例えば「驟雨」、「頓悟」、「小心」、「沙彌」などがある。

④両書の注記の部分が読み方上の違いがある。例えば「日食」、「参星」などがある。

⑤『方言類釋』は全体的に注記の部分に「語幹」に終助詞「ました」を付けている場合が多い。例えば「憔悴」の注記「こんかれ+ました」、「小心」の注記「しょうしん+ました」などがある。

4. 終わりに

『倭語類解』は官版で、日本語、中国語、朝鮮語に優れた雨森東に質したという点で、比較的に正しく、用語的に知識人が使用する日本語と見られる。しかし、編纂された時期が『倭語類解』より少しずれた『方言類釋』を作る時、果たして『倭語類解』は朝鮮の人々に知られていたのだろうかという疑問も残る。

『方言類釋』が日本語の解釈の方面で『倭語類解』を整理、補充してもらったといえば、同じ見出しに当たる日本語積は大体同じであるはずである。しかしながら、上で述べたように、そうでない例も少なくない。こういう原因を考えると、『方言類釋』が作られる時、編者は『倭語類解』を参考しながら、質問相手の発音と同じものは『倭語類解』の解釈をそのまま取り、同じではないものは質問してもらったとおりに記入した可能性が高い。

しかし、両書の書かれた時間のずれが大体半世紀を越えていないことから、『倭語類解』が『方言類釋』に与えた影響はあまり大きくはないと考えられる。また、両書の特徴をみると、『倭語類解』は基本的に見出し語と解釈に当たる注記が書面用語または共通語を使った傾向が多いわりに、『方言類釋』は見出し語と解釈に当たる注記が会話用語または方言を使った傾向が多い。

「類解」類、「類釋」類の諸書が書かれた需要からみると、語彙対訳が主になって、相互のスムーズに交流できるためのものである。そうすると、書面で使う言葉より、一般会話で使う言葉を身につけなければならない。両書を比べて、早く編纂された方が書き言葉の使用率が高く、遅く編纂された方が話し言葉の使用率が高いということが分かった。辞書類を作り始めた時には、基本の言葉からはじめ、だんだん生活上に必要な言葉にまで順番的考慮したのだろう。今後は『倭語類解』の前に編纂された『譯語類解』、『方言類釋』の後に編纂された『華語類抄』も比較しながら、この予測を確定して行きたい。

参考書類

『朝鮮語学史』小倉進平著 昭和39年10月30日

『中国語大辞典』平成6年3月10日

『講談社中日辞典』相原 茂編 第二版

『中日辞典』北京商務印書館、小学館編

『日本語と中国語の対照研究論文集』大河内康憲編 1997年12月16日 合本第I刷発行

『中朝詞典』朝鮮外国文図書出版社 中国民族出版社 2006年6月北京第6次印刷

『対照言語学』石綿敏雄、高田 誠編 共信社印刷所 1995年4月15日

『言語の対照研究』小池生夫 1974年12月10日初版発行

『日本語と外国語の対照研究Ⅳ』一日本語と朝鮮語 国立国語研究所

『方言と標準語』大石初太郎、上村幸雄編